Wide Young

ワイドヤング

打たれ 踏まれて 強くなる

功名急ぐ近道より 誠を果たす回り道

あのころがあるから今がある

空手家

岸 信行さん 新庄市

創世期の極真空手に入門し、二十五歳でニューヨークの極真会館北米本部に指導員として渡り、アメリカのほかルーマニア、イタリアなども巡って極真空手を広めた岸信行さん（全三）＝新庄市北町。実戦空手を極めて道場破りの外国人をたたきのめし、三十七歳でニューヨークに「岸空手」を設立した、武道の達人にインタビュー。

■東京の極真会館に入門したきっかけは。

高校卒業後、地元の企業に就職したけど、本格的に空手をやりたかった。このままで一生を終わりたくない―と、家出して東京で一番強いと言われていた大山道場（極真会館）に入った。当時はまだ、極真の名は知られていなかった。

■練習はどんなものでしたか。

いじめではないけれど、徹底的にたたきのめす、やり方。毎日、傷だらけにされて「殺してみろ」という気持ちで道場に通った。やられるのは嫌だけど、根性なしと思われたくなかった。身長一六七㌢で体が小さかったから、強くなるには人一倍いこしなくては―と思った。

■手の甲がつぶれていますが、血が出るまで壁をたたいたりするんですか。そうなると、もう痛くない？

今でもたたけば痛いよ（笑）。でも、これも修行だと頭に麻酔をかける。血が出るまではやらない。傷をつくると痛くて次の日、練習できなくなるからね。男は自分の痛さで泣いてはいけないの。他人の痛みや情に泣くのが本物。

■二九七五（昭和五十）年の第一回世界空手道選手権に出場されたとか。

ニューヨークに行った二年後に大会があった。大山倍達（ますたつ）館長（故人）に、日本代表の八人に選ばれた時、自分は「修行のために空手をやっている。大会には出たくない」って断った。そうしたら、館長は顔を真っ赤にして頭から湯気立てて怒った。初戦は香港のカンフー格闘家と対戦して勝って、三回戦で反則をとられて敗退した。館長は「極真が負けたら切腹する」って声明を出していたけど、日本勢は上位六位を独占した。

■台湾に指導に行き、現地の格闘家に挑まれて倒した話は本当ですか。

二十三歳の時、極真の普及のため台湾に行くよう館長に言われて、半年ずつ二回行った。館長は「台湾入道と呼ばれる身長二㍍の格闘家がいるから、よろしく」って（笑）。殺される覚悟で行って入道の弟子を五人倒したら、本人が嫌がって、闘えなかった。

■体の大きい外国人と闘うのは怖くないんですか。

そりゃ、怖いよ（笑）。外国人はみんな強く見えて、最初は劣等感にさいなまれた。でも、指導者として派遣されている以上、逃げられないし、「日本の極真の武士道を世界に広めたい」と思っていたから負けられなくて修行した。空手は自分の弱さを見つけて、それと闘う武道。攻撃方法を学ぶだけでは駄目。打たれて踏まれるから強くなる。

■新庄に戻って来たのはどうしてですか。

ニューヨークのソーホーで道場を開いていたけど、母親の体の具合がよくないから地元に戻った。母は三年前に亡くなったけど、父は健在。年に三回ほど、ニューヨークの教え子たちに呼ばれて指導に行っている。大会で勝つより自分自身を鍛える空手を追求したい。自分は、生き方は下手かもしれないけど、功名を急ぐ近道より、誠を果たすための回り道が空手道だと思うから、こっちの暮らしも悪くないよ。

■チャウシェスク政権下のルーマニアで、大統領親衛隊の顧問を嘱望されたという話は？

本当。当時は、大山館長の指示で世界各地に行って指導していた。チャウシェスク大統領の親衛隊長に気に入られて、スカウトが日本に来たけど、嫌だから断った。

きし・のぶゆき　1947年、新庄市生まれ。新庄工高を卒業後、19歳で大山倍達氏の大山道場（極真会館）に入門。20歳で内弟子、22歳で黒帯を得る。25歳で設立4年目のニューヨークの極真会館北米本部に渡る。76年、極真会館主催の第1回世界空手道選手権大会（東京体育館）に日本代表で出場。30歳で極真から離れ、37歳で岸空手を設立。44歳の時に帰国し、新庄市北町に道場を開く。

1980年、アメリカ・デンバーの空手の大会に招待されて氷割りの演武を披露した

渡米直前の岸さん（前列左）。故・大山倍達館長（後列中央）らと記念撮影＝東京の極真会館本部

ちょっと一言

「もごさくて…」じいちゃん代筆したら金賞

宿題

「宿題は学校でやるものだと思っていた。しかも提出する授業の前に」（27歳・男・会社員）―みんなそんなもんだよね、違うの？

「夏休みの宿題を七月中に終わらせようと計画を立てるけれど、何もしないうちに八月に入り、計画を立て直す。お盆が過ぎると、計画を立てるのさえ嫌になって、ヤケになって遊ぶ。その結果、七月中に終わらせる計画を八月下旬に実行するはめになる。泣きながら…！」（三十代・OL）―計画実行？

「小学五年の夏休み、写生の宿題で、絵が苦手なので、おじいちゃんにアドバイスを受けて何とか完成させた。翌朝、起きてびっくり！　おじいちゃんが色を塗り足し、すごく上手な絵に仕上げていた。『何で、いじるの？』と聞くと『あんまり下手だから、もごさくて…』だって。かき直す時間がなくて、そのまま提出したら金賞を受賞し、県内を巡回した。全然うれしくなかった」（31歳・主婦）―金賞おめでとう、じいちゃん。しかし「もごさい」って、いい響きだ。

次のテーマは「遠足」「通知表」「夏ばて」です。ファクス、はがき、Eメール待ってるよ。